



妖星伝 (六)

人道の巻

半村 良

講談社 (4/17刊・¥880)

『妖星伝』は、既に雑誌連載を終えており、完結した長編としては、おそらくわが国最長のSFといえるはずである。

はるか昔に、地球へ漂着した宇宙生命が、あるメッセージを伝えるため、自らを進化の流れに織り込む。そこから、奇怪な能力を持つ集団「鬼道」があらわれる……。

何者かが、人類の進化を探る——このテーマ自体は、これまでも、さまざまなSFで使われてきた。クラーク『幼年期の終り』もそうだし、ヴォネガットの『タイタンの妖女』などは、宇宙人が救難信号発信のためだけに、人類史に干渉するという作品だった。だが、半村良は、そこに独自の舞台（田沼意次おきつぐの時代）と、登場人物（鬼道衆、外宇宙から訪れる補陀洛人ポタラク人、進化の歪みとされる天道尼）を加え、物語を作っている。

本書は、その全七巻中の第六巻目である。一揆侍、栗山定十郎と、鬼道衆から別れ、ただ一人この世に残った、お幾との半生が、日常的視点から靜的に描かれている。

生きるということ、それ自体が悪を生む——全編に流れるこの基調の中で、逆の意味を問う、重要なエピソードだろう。（俊）